

如来二種の回向

——『教行信証』の諸問題（四）——

金子大栄

さて、今日から本論に入るわけですが。本論の題目はこれも大体三つに分けて、まず第一に「浄土真宗」。浄土真宗というものは如何なるものであるかということをもつば「教卷」によってあきらかにしてみたいのであります。第二は「行信論」で念仏と信心。真宗としては非常に重要な問題。大部分をそれに費やそうと考えております。第三はあわやその時になって題を改めるかもしれませんが「真宗から見た仏教史観」ということで、撰化編と申しました「真仏土卷」と「化身土卷」の意をあきらかにしたい。こういう予定であります。

そこで、まず「浄土真宗」ということですが、ここで前もって話しておきたいことは、昨日、日蓮上人と法然上人の話をしたしまして、どこか似ておるといことを申しました。だから何か、いささか脱線したような感じもして、今日はそこを少し修正しておきたいと思えます。それは浄土真宗という題を出しますと、宗祖親鸞には宗旨を開くという心構えと言いましょいか、あるいは意志と言いましょいか、そういうものはなかつたのであるか、それともあったのであるかという問題があります。そして素直に『教行信証』等を見ていこうという人は、他の宗旨の祖師方の様な立教開宗、ここで自分が一つ仏教の精神をあきらかにするのであるというような、そういうふうなものなかつた

のであると言おうとしておられます。その考え方には非常に謙遜な素直な感じもありますけれども、また同時に野心的なものがないのではと、こう言おうとする。従って多くの宗旨の祖師方には、自分が立教開宗で仏教の中心というものをあきらかにするものであるという、野心という言葉は少し強すぎますが、何かそういう野心的なものをあつたように思うところから、宗祖にはそういうものはなかったのではと言おうとするのでしょうか。

しかし、親鸞も真宗というものはこういうものである、ということをおうとしておるのでありますからして、宗旨を開くというようなものはないにしても、親鸞によって宗旨を開けたことはあきらかであります。開けた以上は、また、こうしてあきらかにしたいというものもあつたのでありますから、宗旨を開く、宗を開くという言葉の感じ如何によつては、当然親鸞にもそういうのはなかったということは言えない。ただ、先輩がそういうところへ着眼しましたのは、何か弘法大師が顕密二教ということを言われた気持ち、あるいは禅において教外別伝というようなことであらわそうとしました他の各宗の祖師方の態度と、それから親鸞の態度の上に何か違いがある。その違いをどういうふうに言い表したらいいかということが、宗旨を開くという言葉が親鸞の場合に適するか適しないかということになったのであります。そういう点から申しますと、わしが宗旨を開くんだというようなそういう野心的なものと考えれば、どの宗旨の祖師といえどもないに決まっておると言っていると思います。ただ日蓮上人だけは、わしだけが本当に釈迦の精神を得ておるのであると、こう言おうとしておられるのであるから、何か日蓮には一つの野心的なものが感じられるようでありますけれども、これも日蓮上人自身に聞いてみないともう一つはつきりせんことでもあります。

曾我先生の「日蓮論」を読んだ時に感じた言葉がありました。日蓮もこういうことを言うておると。「身を挙ぐれば慢と思はれ、身を下せば経を蔑にす、松高くして藤長く、源深くして流遠し、是れ偏に日蓮の尊貴なるに非ず、『法華経』の御力の殊勝なるに依る也」と、こうあります。何か非常にいい言葉ですね。「身を挙ぐれば慢と思は

れ」。わしは偉いんだと言うと、あいつ傲慢だと言われる。そういうふうに思われる。さらばと言つて日蓮は卑しいものであると、つまらないものであると言つてしまふというところを蔑ろにする。お経を侮辱することになる。「松高くして藤長く」ですから、高い松の木に藤が絡まっておる。長い藤蔓だと言いますが、藤蔓は長いのではない、松が高いからである。松は『法華経』であつて、藤はそれに抛りかかっている日蓮である。だから『法華経』が偉いのだから日蓮も偉いんだと。「源深くして流遠し」と。水源というのは深いからして従つて流も遠く流れるのでありまして、流が遠く流れているということは源泉が深いからに違ひない。「是れ偏に日蓮の尊貴なるに非ず」と、わしが偉いのではなくて『法華経』の御力がすぐれておるからである、こう言つてあります。やや二種深信に近いようなものもあります。よく読んでみると感じは違ひがありますけれども。しかし、とにかく日蓮は、わしは偉いんだと言つておるけれども、わしは偉いんだということは『法華経』が偉いんだということであつて、日蓮もそういうことを解釈しますれば日蓮には開宗の意志があつたんだということも言えるのであります。しかし、自分は偉いのではないんだと言つてますから、日蓮上人といへどもいわゆる後の人が考えるように、わしが宗旨を開くんだというようなものはなかつたんだとも言えます。

あるいはまた仏教を学ぶかぎりにおいては、一つの形式をもつて何かを見出そうというのが当然であるということになれば、誰だつて仏教を学ぶかぎりにおいては何か一つを見出そうというのがあるに違ひないであります。それにも関わらず、親鸞には立教開宗という気持ちになつたんだと、こう言おうとせられる先輩の気持ちというものも私たちは十分尊重しなければならぬのであります。そうしてそれにも関わらず親鸞によつて、親鸞は開いたのではないだろうけれども、親鸞によつて知らされたものがある。その知らされたものが、こうして開いたということはどうして開かして頂いたという、この宗旨を開くということの上にも一つの他力的な感じがあつたに違ひない。そう思うのであります。言いたいことは十分でなかつたようでありますけれども、とにかく真宗を開くということについ

て昔の人にそういうふうな、宗祖の開宗というものと、多くの宗旨の祖師方の開宗というものと感覚の違いがあるということをあきらかにしようとされたということだけは忘れてはならないと思っております。

そうして浄土真宗という題目で言うているのですが、これはもっぱら「教巻」によってと申しましたのですが、しかし「教巻」というのは全体を貫くものであるに違いありませんからして、「教巻」を中心として『教行信証』を見るときに、そこに浄土真宗というものを顕そうとするのが、この書物であるということが言えるでしょう。「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり」と言うてあります。そうしますれば二種の回向ということがあって、そこに真宗というものがあるのであると。こういうことであります。そして「一つには往相、二つには還相なり」と言うてありますから、つまり往相回向と還相回向ということを説くことにおいて浄土真宗というものがあるのである。しかれば、その往相・還相という思想がどうして出てきたのであろうかということでもあります。この言葉は曇鸞大師の『論註』から出てきておるに違いないのでありますけれども、どうして往相・還相ということでなければならぬのか、そこに一つ考えなければならぬものがあるに違いない。私思いますのに、大乘仏教の問題は自利利他ということであったと思います。いや大乘仏教に限らんでも、仏教全体の問題は自利利他かということでもあります。あるいは宗教という問題を考えましても、自利利他かということでもあります。自分の救われる道であるか、それとも人間の救われる道であるかということでもあります。そうしてその自利ということ、自分が救われるということに殊に大事に考えたものがいわゆる原始仏教というものであろうかと思います。

釈尊の教えの私たちを惹きつけるものは法帰依・自帰依であって、自分に帰依せよと、自分の道を見出すということとであります。その気持ちはどこまでいっても離れないのでありまして、従って今日我々は宗教を問題とする時には要するに自分の問題ではないかと、こう言い切っております。それほど自分というものが問題になる。そうして、そういうようなものにおいて自己を問題とせしめたものは生死問題でしようね。死ななければならぬのである。我々は

この生を受けたのであるが、やがて死ななければならぬのである。その死を控えているところ生の意味を発見するということが人間にとって大事なことではないであろうか。死ぬということだけは独生独死独去独来であって、死ということを考えれば独りで来て独りで去くのであるということであるから、それは当然自己の問題である。こう言おうとするのであります。しかし、大乘仏教にはそれだけでは済まされないものがある。要するに社会人類の為でないか。あるいはキリスト教あたりはその方を中心にしとるのかもしれないが、そこから社会主義というものも生まれてくる。要するに仏教は個人主義である。個人主義というものはある意味において利己主義。個人主義はやがて利己主義にも通ずることになるであろうと。それは本道の道ではない。道は人びとの為に、世の為、人の為になるというものでなくてはならない。そういうことが大乘精神であって、従って大乘教というものが出てきて、そこに自利か利他かという問題が起きているわけでありませう。ですから問題の中心ということになると、自己の問題であると言いながら、しかしそれなら仏教徒のつとめは何であるかと言えば利他でなくてはならないということは、道元禪師のものなど読んでもそうなっていますね。「仏道をならうというは、自己をならうというは、自己を忘るるなり」と。こう自己ということの問題としています。それにも関わらず仏教者のつとめはまず利他を要とすと。本当に自分というものを後にして、そして利他を考えるのが仏教徒のつとめであるということを言うておられるのですが、そこに自利か利他かという問題があつて、自利に偏して自己の問題を強調しようとすることになれば、それは個人主義。善いところで個人主義、悪く考えれば利己主義になるであろう。そんなものであるはずはない。その自己の問題というのが全人類の人間の問題でなくてはならない、ということになると利他ということに心をくばらなければならぬ。その自利と利他とが一つなる道がないであろうか。自利と利他とを対立せしめないで、ただ自利利他というよいうな道がないであろうか。その解決として出てきたものが往相・還相であると、こう考えていいのでしょうか。だから浄土教というものは仏教の全体の立場から言えば、自利と利他との矛盾を矛盾でなからしむる何ものかがなければなら

らんはずであるというところから、往相・還相ということが説かれるようになったに違いない。

そこで真宗の人間観とでも言いましょうか、そこに一つの考えるべき問題があると思います。『正像末和讃』を読んでみますとこういう和讃があります。

無始流転の苦をすてて

無上涅槃を期すること

如来二種の回向の

恩徳まことに謝しがたし

と、こう言っております。如来二種の回向というもの、往相・還相の回向というもの、これがなければ我々は無上涅槃を期することはできない。仏教は涅槃、涅槃と言うておるけれども、その涅槃は小涅槃であってはならない。お釈迦様はそうでなかったかもしれないけれども、そのお弟子たちの求められた個人的な、自分の問題であるという生死問題の解決の仕方は、結局小涅槃でなかったであろうか。いわゆる小乗、声聞根性の涅槃は小涅槃であると言わなければならぬであろう。

またちよつと横に逸れるかもしれませんが、昨日申しました一遍上人のような気持ち、あるいは平安末期にたくさん出ました世捨人の気持ちは、あるいは小涅槃ではないであろうか。人間世界を厭うて、そして山に入って修行するというような考え方は小涅槃でないであろうか。無上涅槃、即ち大涅槃でなくてはならない。その大涅槃というものは期することはできない。期することができないのは何故であるかという、自利に偏すれば利他を有しない。利他をしようと思えば自利を忘れるという、その自利・利他というものの矛盾がどうしても解けない限りは無上涅槃を期することはできないのである。無上涅槃を期することが可能になるのはなぜであるかという、如来二種の回向である。こういうことであるからして、回向というのが自利・利他の矛盾を解決するために、解決するものは往生淨

土の教えの他ないということであるに違いないのであります。

しかしそれはなぜか。なぜかというに「無始流転の苦をすてて」という、そこに人生観と言いましようかね、あるいは人間観と言いましようか、一つあるわけでありませぬ。「無始流転の苦」というような言葉のあらわすものですね。少なくとも我々はそういうことを経験しておられない。私たちの人生において経験していることは、いろいろな難儀なこともあった、苦労したこともあったということでありませぬ。自分の一生の思い出を語れと言われませぬ、そうすればそういうことで難儀したことがある、こういうことで苦労したことであるということが、まあ告白しろと言われればね、そういうことしかないでしょうね。しかしそうはいましても、難儀したと言っても、そう難儀ばかりしておったわけではなく、安楽な歲月もあつたに違いないであります。苦労したと言いましても、のびのびとした平安な年もあつたんであります。だからしてその難儀、苦労したことを「無始流転の苦」と言い表すことはできない。そして難儀や苦労を語るといふことは、聞く人によりましてはまた自慢が始まつたといふふうにも聞こえるでしょうね。あるいは、また愚痴が始まつたと聞こえるでしょうね。自分の生涯の経験を語るといふことは、何かの意味において自慢になるか、それとも愚痴であるかということでありませぬ。しかし、「無始流転の苦」といふ言葉はそういうものを感じさせませぬ。「無始流転の苦」といふことが、自慢でもなければ愚痴でもない何かを見ておる。恐らくこういう言葉というものは、我々は生まれ変わつて死に変わつて、なるほど輪廻という言葉もあるから、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上と六道の間、長きをかけて生まれ変わりに死に変わったものであるというそういう思想であつて、あるいはそういう神話があつて、そういうものが親鸞にも受け入れられての言葉であると、こう言われるかもしれませぬ。またそうではないとは言ひ切れませぬ。

しかし、もしそういうならば六道輪廻という思想がどうして人間に生まれたのであろう。六道輪廻の思想であると片付ける前に、人間はどうして六道輪廻ということをおもひついたのであろうか。言わないでおれなかつたのであろう

と、こういうことを言う時にそこに衆生海を見つめる心というようなものがあるように思います。これはあなたたちあまり実感したことあるかないか知らんけれども、動物を見るとね、何かこう、本当の他者、自分でないもの、という感じよりはそこに一つの自分があるという感じの方がどこかにするんでないでしょうか。例えば、もう老人なので動物園には行きませんが、若い時分に動物園に行つて、そうして獅子だの虎だのをじつと見つめておる。猛獣であるから怖い。怖いはずであるのにじつと見つめておるといふと、ああお前はそこにおつたかと、言いたいような何かを感じる。同じ生物としての命の限りというものが阿頼耶にあるのであります。そこにその生を同じくしておる。どこか生命の根源において一つのものであるということが、それが重なつて、なぜに同じ生物でありながら、我々は人間であるといつて威張り、お前たちを動物であると貶けなさなければならんのかなという、そういうところに生けるもの悲しみも感じられるのではないのでしょうか。それは私によると植物にも及ぶ。私はかつて花の苗を買つてきて、そして蜜柑箱の上に蒔いて、そしてだいたい伸びますといふと、その花を移し植えをする。その時にしばしば思つたことがある。なぜこれだけのものがこれから地上へいつて伸びることが許され、これだけのものが捨てられなければならないのだろうかということが、植物にも何か運命があるような感じがする。専門家に言わせるとそんな馬鹿なことはないそうだね。分かるそうだな。芽が出てくれば、これは育たないものであり、これは育つんだと分かるそうであります。分かつてもいいんだがね、私のように分からん人間はなおさらですが、どうして人間の気まぐれで捨てられるものと、それから育つものがあるのかといふと、一種の悲しみを感ずる。そういうふうなものがあると同時に、それがやがて人間の歴史観。私は歴史の内観と言つてありますが、我々の生命の根源には親たちがおる。おじいさんたちがおる。ずつと遡りますと人間が地上生活を始めたその時から、人間の一生涯の間には生物の進化の跡を、つまり何千年か何億年か知りませんが、その生物の歴史的な跡を人間が一生の間に繰り返すそうです。

ですから人間の一生と言つてゐるものの内側から見るといふと、そこにいつを初めとも知らない無始従り已来是の如

しという言葉。「無始流転の苦をすてて」という「無始」という言葉が何か人間の存在の在り方をあらわしているように思われるのであります。人間の知識が進むに従って進歩するんだと言いながら、便利になれば便利になるだけの相当にまた害がある。利あれば害あり。それを得意になって進化だ進化だというて、そして自己矛盾に陥っておる。無始従り已来是の如しと。それが人間の運命というものである。その人間の運命というものを個人のうちに内観する時に、その時に先程申しました動物を見ても植物を見つめる心。生物の歴史を内観し、そしてその感情によつてのみなを見つめる時に、そこに「無始流転の苦」というその言葉がはつきりと響いてくるのではないのでしょうか。

我々の一生涯はただ個人的なもののように思いますけれども、その一生涯には生物の歴史も含んでおるし、またものみはみな自分と別のものでないというそういうものがある。だから中身から言えば人類の問題であり人間の問題である。しかもそれにも関わらずかたちから言えば自己の問題である。自己の問題であるというかたちできながら、その中身は一切衆生の問題である。故に一切衆生の救われる道でなければ自分は救われぬし、しかも一切衆生を救う道は自分が救われている道を他にしてありえないのであるということがですね、自利利他の問題をどうするかというのであったに違いない。そう考えて、そしてその和讃を見ますというと、「無始流転の苦をすてて」という言葉がいかに適切で、こう言い表す他ないということがあります。「無始流転の苦をすてて」という表現が、禪とかあるいは密教とかというようなものが、今日というてもあるのでしょうか。なければならぬはずであると思えますけれども。しかしこういう言葉で言い表さなければならなかったところに、そこに私は親鸞的の感情というものがあるように思うのであります。だから『教行信証』の「信巻」におきましても、「一切の群生海、無始より已来乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし」と、一切群生海と呼んでおります。一切群生海と言っていることはすなわち自分であります。思えば「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」とこういう言葉は「自身は」と言うてますけれども、この「自身」というのは、自分と切り離しての「自身」であるなら

ば、必ずしも「罪悪生死の凡夫」と言わなければならんことでもないのでしょう。「信卷」の「一切の群生海、無始より已来乃至今日今時に至るまで」という言葉を、それは「一切群生海」のことであって自分のことではないと、誰もそんなふうには読みはしません。あの言葉を読みながら、そこに本當の自己の問題であることを感ぜずにおれんようにできておるのであります。「久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく」というふうな表現をしなければならんところに、そこに浄土真宗というものがあると。

こういたしますと、自利と利他という言葉であらわされる場合もあるけれども、しかし自利と利他ということではないものがある。もし自利と利他という言葉を用いるならば、自利すなわち利他であり、利他すなわち自利であるというふうな、そういうものがなくてはならない。横へ逸れるかもしれないが、本願力というものはそういうものなのだろう。だから「行卷」の終わりに「他力と言うは、如来の本願力なり。『論』に曰わく、「本願力」と言うは、大菩薩、法身の中にして」云々と言うてありますね。そうして「たとえば阿修羅の琴の鼓する者なしといえども、音曲自然なるがごとし」と言うてですね。それから自利にあらざる利他はなく、利他ならざる自利はないという、それが本願力というものです。本願力においては自利にあらざる利他はなく、利他にあらざる自利はないと、こう言うてあるところ。そこに自利即利他、利他即自利であると、それを言い表そうとして願力と言ったものに違いない。しかればその本願力というものは何であるかと言えば、要するに浄土でしょう。浄土というそこに自他一如の世界があつて、そしてそこに往生するというその往相が回向であるが故に、浄土というものを目指して、そしてそこに生まれんと願う心がそれは自利といえども、要するに利他を具えている自利である。故に、往相回向の利益には還相が具わつておるということ、つまり往相・還相ということがあつて、しかもそれが仏のはらきであるという回向ということがなければ、仏法ということは成り立たんのであるということ、そこに浄土真宗と言わずにはおれなかつた気持ちがあるのでなからうかと思つてあります。ですから一生で苦しいことがあつた、悲しいことがあつた、だから

浄土を願うんだというようなことでなしに、「無始流転の苦をすてて」という、そういうふうな深い感情。そして人間生活の悲しみというものがあつて、そしてその悲しみを持ちながら一切衆生が救われる、そしてそれによって自分が救われるということであつて、大乗教の目指していた無上涅槃、大涅槃を期することができる。期待ができるという。期するという言葉の、その感じが深いですね。期待ができるということは「如来二種の回向の 恩徳まことに謝しがたし」と。こういうところにあるいは浄土真宗というものを理解しようとする為には、必ずこの二種回向ということ。往相・還相という言葉において往相は自利といえどもそこに、

南無阿弥陀仏の回向の

恩徳廣大不思議にて

往相回向の利益には

還相回向に回入せり

で、還相の徳を具えて、自分が救われるということが全ての人の救われる道を開くことであるということによって、そこに往相自利において還相利他の徳を具えとる。

さあ、往相・還相のことはまたもつといろいろ話さなければならんが、今ちよつとここで行き止まりましたから、このくらいにしておこう。ともかくも往相・還相ということでは、「無始流転の苦」は救われない。つまり自利だの利他だのなんてことはやはり、世界に五億の人間がおれば五億の個人がおることでしょうね。つまり複数であらわされるものであります。中身は複数であるけれども、言い表そうとするものは単数のようなものがないものかね。これは国語のことをあまり分らないのですから困るんだだけでもね。「我々」という言葉と「我等」という言葉と私は区別したい気持ちを持っているのであります。「等」の中へみんな入ってしまう。しかし「我等」なのです。「我々」というとたくさんあるということ。しかし「我等」というとみんな一つ一つしかないのだけれども、

しかも「等」において全てを含んでおるといふ「我等」といふ言葉がある。外国に、英語にそんなことを区別する言葉がありませんかと、多少心得ている人に聞いてみたこともあるのですが、「さあ？」というようなことです。とにかく、「という言葉に対して、Weという言葉がある。「我々」というようなときはWeということでしょうね。しかし「我等」ということはWeではない、「我々」ではない。Human beingとかMankindとかという言葉がありますと。どうですかね。MankindとかHuman beingとかという言葉で私の言おうする気持ちがあらわれるわけなら結構なのですが、とにかく「無始流転の苦」といふことよつて一切の生類を見つめながら、そして生がそれ全体が自分であるという感じをどうして親鸞が持たれたかということ。これはそれこそ越後に流されて、そして関東に流浪して、そして多くの庶民に交わたつての感じであつたのであると、こつ言つていいのであらう。そこに真宗の在家仏教があり、あるいは庶民仏教があるのだということも結びつけてみたいのであります。こつして回向ということが真宗の性格をあらわす。

私はちよつとこつで注意しておきたい。それは「絶対他力」といふ言葉であります。真宗の教えは絶対他力であると言われております。こついう言葉を使う人の気持ちもよく分かるのですから、それが間違ひだとは僕は決して申しません。確かに絶対他力の教えであるに違ひない。しかし『教行信証』には「他力」といふ言葉に「絶対」といふ形容詞をつけた言葉がないのです。「絶対」といふ言葉は、『教行信証』には「行巻」に「絶対不二の教なり」「絶対不二の機なり」と、教えは絶対的なものであるといふ「絶対不二の教」「絶対不二の機」といふこつに「絶対」といふ言葉を使つてありますけども絶対他力といふ言葉は用いてないのであります。従つて絶対他力といふ言葉で表そうとする感情内容と、他力本願とか本願他力といふ言葉であらわそうとする感情内容とはどこか違ひがあるように思われる。

それはいつでも例に出すのですが、道元の『正法眼蔵』に「生死の巻」といふものがある。その「生死の巻」に

「身も心も仏の家に投げ入れて、仏の方より行われもてゆくとき、ちからをもいれず、心をもついやさずして仏となる」という、そういう言葉がある。もう少し最後に言葉があるのですが、いまはつきり記憶しておりません。ともかくも身も心も仏の家に投げ入れて、仏のお力の中へ身も心も投げ入れて、仏の方より行われる。仏のおはからいにお任せゆく時に、力をいれる必要もなければ心を費やす必要もない。そのまま仏になるのだと言うてあります。これが絶対他力。

先程は日蓮の言葉の上にも法を尊ぶ言葉があると申しましたが、こういうようなことを尋ねていきますと、いや密教だ禅だ念仏だということを言うとするのは、いわゆる宗派我であって愚かなことかもしれません。しかしながら絶対他力という言葉に親しいものを考えますれば、道元禅あたりかと。私たちの宗旨は本来に自力なのでしょうかと、ある禅僧が言うたことを覚えています。そういうことでもあり、あるいは「生死の巻」というのは親鸞流の考え方をするのに対して、道元が他力というのはこういうものだと思えられたという説もあるということでもあります。が、投げ入れて、という投入という言葉。この投入という言葉で思い出しますのは、他力という思想は曇鸞にあるのですが、その曇鸞の『論註』の他力というのを分解しますというと、因位の法蔵願力というものと、昔の法蔵願力というものと、今日の阿弥陀仏の神力というものとがあると。神力不思議であって、それを因位の願力・果上の仏力と呼んでおります。因位なんてものは済んでもうたことなのであって、今日我々を救うものは果上の仏力、阿弥陀仏の力に違いないのだとあって、だからして本願ということなどは話としては出て来るけれども実際は仏力。仏力一つで救われるのであるということを主張して異安心に問われた人もおります。果海投入説を唱えて。その人はもう、じきに回心して間違っておりましてと言われたそうではありますが。そういうふうなことがあるとしますというと、その因位の願力というものが果上の仏力をあらわすものである。仏力というものが願力をあらわすということは一体どこにあるのであるかというと、今の投入という言葉、投げ入れるという言葉は要するに仏の方へ投げ入れるのである。回向の思

想はそうではなくて、凡夫の方へ仏が投げ入れられるということになりましょうか。凡夫の方へとはたらく。だから願力というのは仏の力が法蔵菩薩というものもみなそうなのでありましょう。凡夫の上へ仏の力をあらわす。他力感情はここにある。仏に向かって帰依することではなくて、手元に、念仏をするところに、信心するところに、そこに御回向の心があるのであるところに、ここに真宗というものがあるのでなくてはならない。

だから繰り返し申しますが、もちろんそういうことを知っておってですね、そして絶対他力と言おうとする気持ちにはよく分かるのですが、繰り返しますが間違っておるとは言わないけれども、言葉遣いとしては親鸞の心境は回向ということである。本願力回向ということである。こちらから仏の方へと向いて、そしてこちらの心を無くして、いわゆる忘我の境に立って我を忘れて、そして仏の力において任せるということではなくて、仏の御力が我々の煩惱の上にあられて、そして念仏となり信心となるという手近なところに真宗というものがあるのである。それが出家の教えでなくて在家の教えである。そして庶民の救われる道はそういう意味の他力であって、従って念仏もうし信心をするということに回向がある。その回向ということ一つが真宗をあらわすのである。「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり」と、その往相回向は回向にして自利にして利他を含んでおる。還相回向はその利他の徳がまた現実にあられてくるということ、しかしその為には浄土の観念と言いますか、浄土というものの思想内容はこの世と同じ次元のものでない、あるいはこの世を浄土にするというようなものでもない、確かに勝過三界道の世界があつてそこへ往くことにあることはいまさら言うまでもないことであります。

そういうことで回向ということ、往相・還相ということが浄土真宗でありまして、時には浄土を略して真宗と云うこともあるのですが、それが真実の宗教というものである。宗教とはそういうふうな絶対無限なるものを認めてそして己を忘れていくというようなものでなくして、自分はどこまでも煩惱具足の凡夫であり、罪悪生死の凡夫であるというそこへ仏の慈悲心を頂き、そこに仏の願いの心を得させて頂き、念仏して信心していくところに浄土真宗

というものがあるのである。従つて浄土真宗をあらわすものは二種の回向ということであるということが頂けるのであります。

繰り返しますが、「無始流転の苦」というような言葉の表現内容を、今日はだいぶ話したように思いますけれども、和讃について話したのですが、和讃というのは講釈のできないものであると昔から言われておるといふことであります。蓮如上人の『御文』は解釈する必要のないものである。和讃は解釈しようと思つても解釈のできないものであるということでありませう。しかし解釈できなかつたらどうするのであるか。解釈できなかつたならば何遍でも拝読して、その何遍でも拝読してそのうちに、そのお言葉の上に流れているものを言い表せれば、それが和讃の解釈であります。和讃だけでなく親鸞の言葉の表現には、昨日も申しましたように何か分かりにくいものがある。しかし、その分かりにくいものがあるけれども、そこに本当に人生の実感というものがあつたに違いないということを我々は忘れてはならないと思つてあります。今日はここで。

(本稿は一九七二年五月一八日の大谷大学における講義『「教行信証」の諸問題』を筆録整理したものである。文責編集部)